

---

# 沈黙の15分～ラスト15分の奇跡

あこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

沈黙の15分〜ラスト15分の奇跡

### 【Nコード】

N3189BA

### 【作者名】

あこ

### 【あらすじ】

ラスト15分。。  
それが、彼らに残された時間だった。  
その15分に何があったのか。

これは、劇場版名探偵コナン 沈黙の15分のラスト15分を小説化したものです。

## 1・ダム決壊

あの時、コナン達を狙撃したのは、遠野みずきだった。妹・遠野なつきの事故の真相を告白し、泣き崩れる。そんなみずきの肩を、武藤は優しく抱いていた。

一同が優しく2人を見つめる中、哀がふと回りを見渡すと、一刻を争う非常事態が発生していた！

「江戸川くん！ランプが点滅してるわ！！」

「何っ？！」

哀の叫びで、コナンが弾き飛ばされた起爆装置に目をやると、起爆装置がオンになっていた。

直ぐ様、コナンはダムに身を乗り出し、管理事務所から見つけた爆弾を確認する。

そこには、起爆装置同様に、怪しく点滅する光があった。

しまった。あの時。。。

コナンは、山尾を麻酔銃で眠らせた時のことを思い出していた。

今思えば、彼が意識を失う一瞬前、起爆装置をオンにしていたようにも感じる。。。

そう思うコナンだが、何もかもが今となっては遅すぎる。

タイムリミットは15分。あの時、確かに山尾はそう言った。

どれほどの猶予が残されているか分からない。

「みんな逃げるんだ！爆発するぞ！！！」

「え？！」

コナンの突然の発言に、状況の読めない探偵団が聞き返す。

しかし、コナンは探偵団の疑問に答えず、「ぐずぐずするな！急げ！！！！！」と叫ぶ。

ド　　ン！！！！！！！！

耳障りな爆発音と共に、地震の様な振動が発生する。

一刻も早く、ここから避難しなくてはいけない。

コナン達は、ダム監視が出来る高台へと急ぐ。

「冬馬、早く！」

元太が、冬馬の手を引きながら走る。

再び、爆発による揺れが発生し、バランスを崩した歩みが転んでしまった！

光彦は、歩美を助けようと立ち止まろうとする。

「止まるな！」そう光彦に叫び、歩美を起こす。

「大丈夫か？行くんだった、走って！」

このまま爆発が続いたらダムが崩壊する。

一瞬の思考がコナンの足を止めた。

その瞬間、コナンと先を行く歩美達との足場に亀裂を走らせる。

尚も続く不協和音。

この音、外壁が崩れ始めてる音だ。何とかしねえと、決壊も時間の問題だ。

一刻の猶予もない。コナンはダムの縁に立ち、打開策を思案する。

辺りを見回すコナンの追跡眼鏡は、村の手前のスキー場を捉えた！

ド　　ン！！！！！！！！

「ケガはありませんか？」

「皆さんいらつしやいますね?!」

一同を安全な場所へ避難させたダム職員達は、安否確認を行っていた。

みんな無事に避難した ように思えた。

「コナンがいねえんだよ!!」元太の発言により、みんなに動揺が走る。

「男の子がひとりいないんです!」

「わたしを助けた後、いなくなっちゃったみたい」

あの時、コナンは確かに自分の後ろにいた。その後、歩美もコナンの姿を見失ってしまった。

「一体何を」

哀がそう呟いた瞬間、一際大きな爆発が彼らを襲う。

「まずい!ダムが決壊する!」

「皆さん下がって下さい!」

が、探偵団には受け入れられない。

「ダメ!まだコナンくんが!」

「コナンくんが来るまで動けませんよ!」

まだ姿を現さない親友を待ち続ける。

「コナン」

「何をやってるの?工藤くん」

声にこそ出さないが、哀の心も不安が支配していた。

その時、エンジン音が響き、ダムの斜面を一気に滑り降りるコナンの姿が探偵団の目に写る。

コナンのジャンプと同時に決壊するダム。

奇跡的に脱出したコナンに、探偵団は喚声を上げた。

「やったー!」

「いけー!コナン!」

「え?どこ行くの?」

「彼、この水をとめるつもりよ！」

ただ1人、コナンの作戦を見抜いた哀が叫ぶ。

哀の発言は、探偵団や、回りの大人達を驚愕させるのに十分だった。

「無茶な あんな子どもにも出来るわけが」

「巻き込まれたらひとまりもないぞ！」

そう、巻き込まれたら最悪、命を落とすことになるだろう。  
しかし。

「出来るもん！」

「コナンなら出来るぞ！」

「少年探偵団に不可能はありません！」

かつて、コナンが起こしてきた数々の奇跡。それを目の当たりにしてきた歩美達は、こんな状況でもきつと奇跡を起こしてくれる。

コナンに不可能なことなんてないんだ！

歩美、光彦、元太の3人はコナンの奇跡を信じていた。

「頼んだわよ、工藤くん」

走り去るコナンの後ろ姿に、哀は心の中で呟いていた。

確か村の手前に使われていないスキー場があったはず

。あの新雪を使えば何とかなるかもしれねえ

そう考えたコナンは、村手前のスキー場を目指し、スノボを走らせた。

## 1 ダム決壊（後書き）

あこです

沈黙の15分のラスト15分が衝撃的過ぎて、思わず小説化しちゃいました（笑）

果たして、コナンは無事にダムの水から村を救うことは出来るんでしょうか。

## 2・逃避と疾走

ダムに行けば、携帯電話が使える。  
コナンと連絡を取る為、蘭達はダムの職員が運転する車に乗り、北ノ沢ダムへと向かっていた。

キー

走っていた車が急停止する。  
職員の目に飛び込んで来たのは、ダムが決壊し、大量の水が流れ込んでくる姿だった。

「大変だ。ダムが危険です！逃げねえと！」  
突然の発言に驚いた小五郎、蘭、園子、阿笠の4人が弾かれたように前を見ると、ダムから水が溢れていた。  
彼らに乗せた車は、来た道を逆走するほかなかった。

小五郎達がダムの異変に気付いた頃、コナンはダムから流れ出た濁流と並走していた。

くそ、このままじゃ間に合わねえ。危険だが、森を抜けるしかない。っ！  
覚悟を決めたコナンは、スキー場への最短距離である、危険な森を抜ける道にスノボを走らる。

一瞬の気の緩みが命取りになる。  
そんな危険と隣り合わせの森を、的確なスノボ捌きで抜ける。  
そこにあっただのは、自分より僅かに後方を走る、濁流だった。  
更なる森抜けの為、水の上を走るスノボ。漏電したのか、火花をあげている。

「くそっ！もう少しもってくれ」  
コナンは、祈るような思いでスノボに命じ、更なる森抜け道に足を

踏み入れた。

その頃、村唯一の道路を走る車に乗る小五郎達も、先の読めない展開に、苛立ちを覚える。

「おいっ！この水が一気に流れ込んだら、あの村はどうなるんだ？！」

「大変なことになります」

「そんなんじゃないわよっ！」

「間違いない　村は水没するでしょう」

園子の“もつとハツキリ教えてよ”という発言に、ダム職員は、覚悟を決めて答える。

自分達の予想と変わらない見解。しかし、改めて発言され、蘭や園子、小五郎と阿笠も言葉を失ってしまった。

村水没という、最悪の結末を防ぐ為、スノボを走らせていたコナンの目に、廃スキー場が飛び込んで来た。

「見えた！」

そう叫んだコナンは、スキー場に飛び込み、頂上へと上っていった。

コナンがスキー場に飛び込んだ瞬間、蘭達に乗せた車がスキー場前を並走する。

車に乗った蘭の目に飛び込んで来たのは、スノボを走らせるコナンの姿。

「コナンくん」

蘭の声で小五郎達も、コナンの姿を確認する。

「あいつ　、何をする気だ　？」

コナンは、スノボのターボエンジンのアクセルを踏み、急加速して山頂を目指す。

幾つもの「S」字を描くようにしてスノボを走らせるコナンの考え

に、阿笠が気付いた！

「雪崩じゃ！雪崩を起こし、水の流れを変えようとしているんじゃない！」

コナンの考えはこうだ。

水の流れを止めることは出来ない。しかし、水の流れならば変えられる。

村に来たあの日、役場で山尾と氷川が雪崩が続発した為に閉鎖されたスキー場について話していたことをコナンは覚えていた。

だから、コナンは人為的に雪崩を発生させ、天然のダムを作ろうと考えたのである。

頂上を目指すコナンのスノボはもはや限界だった。

頂上まで1/3を残した辺りで、スノボは黒煙を吹き、停止してしまった。

慣性によって投げ出されたコナンが雪かは這い出すと、シユプールをつけるはずだった山頂への道を睨む。

「くそお、くそ、くそおー、くそ、くそー！！！！！」

やり場のない悔しさから、コナンは自らの眼下にある雪を殴る。

ゴ

地響きのような音が聞こえ、真新しいシユプールから頂上に向けて地割れのような亀裂が入る！

亀裂は、コナンを越え、山頂付近まで押し迫った。

「あ、ああ」

コナンが声を出せずに驚いていると、それは発生した！

## 2・逃避と疾走（後書き）

あこです

やっぱ、セリフがない場面の繋ぎって難しいですね（笑）

あと、お話をどこで切るかも悩みどころです。

今回入れるつもりだった話を次回に回したので、次回かなり短い話になってしまいかも（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3189ba/>

---

沈黙の15分～ラスト15分の奇跡

2012年1月10日00時50分発行